

萬福寺だより

第 47号

梅ばい花かり流ゆう詠えい讚さん歌

大だい聖しょう釈しゃ迦か如にょ來らい成じょう道どう御ご詠えい歌か (明み星しょう)

明あけの星しょう仰おほぐ心こころは人の世よの

光あめつちとなりて天地あめつちにみつ

この原稿を書いている十二月上旬、世間はコロナ禍にも負けずクリスマス一色となっています。同じ時期、修行道場である永平寺では例年と変わらずに臘八摂心(ろうはつせつしん)が執り行われています。臘八摂心とはお釈迦様が十二月の一日から一心に坐禅修行に打ち込まれ、八日目の朝明けの明星が輝く頃にお悟りを開かれた故事にならない、終日坐禅修行に打ち込む集中修行期間の事です。雪掻きなど永平寺維持に係る仕事もあるので、全ての雲水が坐禅修行に参加する訳ではありませんが、私は運よく天候にも恵まれ全日程で参加出来ました……何故か当時在籍していた寮舎で、全日程の参加を希望したのは私一人で、その後周囲から変人扱いされる事になりましたが(苦笑)残念ながら悟りの境地には至れず、ひたすら足が痛かった八日間でしたが、僧堂前雪囲いの間から明けの星を眩しく仰ぎ見た事を今でも良く覚えています。

お釈迦様は悟りの瞬間を「明けの明星の輝く中で、私も大地も生きている全てのものが同時に悟りを開いた」と説かれています。大聖釈迦如来成道御詠歌(明星)の歌詞は、そのお言葉から作られました。では、お釈

迦様が開かれた「お悟り」とは一体どのようなものなのでしょうか？

お釈迦様はお悟りになられた内容を「縁起の法」と説かれています。縁起とは「全ての現象は、原因や条件が相互に関係しあつて成立しているものであり、独立自存のものではない」「故に、条件や原因がなくなれば結果も成立しなくなる(無くなる)」と云う考え方です。例えて言うならば「蠟燭が燃える」と云う事象を「蠟」という可燃物、「燃焼を可能とする酸素」と云う条件に



(上) ブッダガヤ、大菩提寺の菩提樹
お釈迦様は菩提樹の下でお悟りを開かれた。
後の仏教弾圧で伐られ、現存するのは接ぎ木として保存された三代目
(スリランカで接ぎ木された樹が里帰りした物)

「着火するに足る熱エネルギー」と云う原因が重なる事で「蠟(可燃物)が無くなるまで、高熱と光を発する燃焼反応が継続する」と云う結果が生じると分析するようなもの。これ等の条件、原因の何れか一つが欠けても「蠟燭が燃える」事にはなりません。同様に人生における苦しみにもその条件と原因が有り、その結果として苦しみが成立してしまいます。故に、その条件と原因を除去する事で、結果は苦しみも成立しなくなり消滅する事になるのです。「縁起の法」が別の言い方で「因果」と呼ばれる所以です。

縁起の法を体得されたお釈迦様は、次にその真理をどのような方法で人に伝えたら良いのかと考えられました。そこで具体的な人の生き方としての「四諦(したい)説」を示されたのです。四諦とは四つの真理の事で、苦諦(くたい)・集諦(じつたい)・滅諦(めつたい)・道諦(どうたい)を言います。四諦説の説

明には、よく病気を治す例えが用いられます。其の一「苦諦」は「症状」を知る・自覚することです。そしてこれが何よりも重要な事なのですが、本当に苦しい時人間はそれを自覚できない事が有ります。周囲の方との触れ合いの中で「普段とは様子が違う」と、本人に伝える事はとても大切な事なのです。其の二「集諦」は病気の「原因」を知ることです。症状と原因の特定ができれば、治療を始める事が出来るようになります。其の三「滅諦」は病気が治った健康状態のことです。体に無理の無いバランスの取れた状態に戻す為には、適切な目標を定める必要があります。其の四「道諦」は正しい治療と薬、即ちお医者様の指導にお釈迦様の教えに従った適切な療法・修行を指すとされます。薬も飲み方や分量を守らなければ毒になり、リハビリも過ぎれば体を壊します。何事も専門家の指示に従う素直な心が大事です。

滅諦(健康状態)に至る為には、苦しみの原因を取り除く正しい行動を繰り返すしかない、お釈迦様は坐禅修行において確信なされました、これこそがお釈迦様の開かれたお悟りに他なりません。

お釈迦様は悟りを開かれたその時から、世界全てのものが「縁起の法」の中に生き、それを自覚して学び、あるべき姿で行じ救われる事を願い、教えを示されました。

「人の世の光となりて天地にみつ」とは、その願いを継承し自分達も伝え行く事を誓う言葉でもあるのです。

